

神は光とやみを区別されることをよとされた

【聖書箇所】創世記 1 章 3～5 節、Ⅱコリント 6 章 14 節～7 章 1 節

ベレーシート

●前回から聖書のいう「光」の概念について、シリーズとして学び始めました。前回お話ししましたが、創世記 1 章 3 節の「神が『光よ。あれ。』と仰せられた。すると光ができた。」という訳が、改訂 3 版では「神は仰せられた。『光があれ。』すると光があった。」と改訂されました。この改訂のポイントは(おそらくですが)、神が「光よ。あれ。」と言われたそのときにはじめて光が創造されたということではなく、光はもともと存在しており、天と地の創造の舞台で、神がその光に対して「やみの中から輝き出よ」と呼び出したということです。この「光」にふれた使徒パウロがそのように理解していた(Ⅱコリント 4:6)ことをお話しました。そして、最初に神によって呼び出された「光」の正体とは、**神が御子を通して、(世界の基が置かれる前から)「あらかじめ定められていた」神のご計画、神のみこころ、神の御旨、神の目的のことだということも** お話しました。実は、このことを理解するだけでも大変な悟りを得たことになるのです。というのは、この「光」(「オール」 אור)について正しく理解することは、本来、私たちの生まれながらの知恵では絶対に理解できないことだからです。

●詩篇 36 篇 9 節に「**私たちは光のうちに光を見る**」というフレーズがあります。「光のうちに」という訳は「光によって」とも訳せます。また、「見る」(「ラーアー」 רָאָה)という動詞も、「分かる、理解する、知る」とも訳せるのです。つまり、「**私たちは光によって、光を理解する**」ことができるということです。使徒パウロがダマスコ途上で、真昼に、「天からの光」に照らされたことで彼の目は塞がれ、三日目になって「目からうるこのようなもの」が落ちたことで視力が回復し、同時に、自分に照らされた「天からの光」が何であったのかを理解できたのです。パウロは「天からの光」によって、はじめて自分が「やみの中にいた」ことを知りました。それまでの彼は、自分がやみの中にいることに全く気づかずにいたのです。

●詩篇 119 篇 130 節には、「みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまのない者に悟りを与えます。」とあります。このみことばによれば、みことばの戸が開かれることと、「悟り」が与えられることは密接な関係があるようです。「悟りがなければ、滅びうせる獣に等しい」(詩篇 49:20)というのが聖書の立場です。「悟り」は、口語訳では「知恵」、新共同訳では「理解」、英語では understanding と訳されます。

●皆さんはカメラの仕組みを知っていますか。カメラというのは「レンズのついた暗い箱」のようなものです。その暗い箱の中に光を入れることではじめて写すことができるのですが、その光の量が少ないと写した写真は暗くなり、反対に光の量が多いと逆に白っぽくなって何も見えなくなってしまうわけです。ですから、光の量を調節して光をカメラの中に入れることで写真を撮ることができるわけです。みことばの戸が開かれると、暗やみの中にいる「わきまのない者」(新改訳)、「無学な者」(口語訳)、「無知な者」(新共同訳)、

「愚かなるもの」(文語訳)、「単純な者」(尾山訳)、「素朴な人」(典礼訳)は、今まで見えなかったものを見ることができて、「悟り、知恵、理解」が与えられるのです。太陽を見ただけでも、一時、目が見えなくなりますが、使徒パウロの場合には太陽よりも強い光であったために、彼の目が見えなくなってしまったわけです。目が見えなくなった三日間は、カメラで言うならいわば露出補正を施す期間でした。光の量を再度調節することによって、それまで真っ白くなって何も見えなくなっていた目のうろこのようものが落ちて、見えるようになりました。それまで自分が見えていると思っていたけれども、実は見えていなかったものがあり、天からの光によってはじめてそれが見えたことで、彼に悟りが与えられるようになったのです。その結果、パウロはイエシュアごそイスラエルの歴史の中で神が約束しておられたメシアだと悟ったのです。つまり「見えるようになった」、「理解するようになった」のです。このことは実に驚くべきことです。「**私たちは光によって、光を理解する**」とはどういうことかを、パウロを観察することで間接的にそれがどういうことかを知ることができます。しかし、それは自分が理解することとは別です。私たちも一人ひとりが直接的に天からの「光」に照らされなければ、「光」を理解することはできないということです。「光」を理解するとは、神の奥義を理解することでもあります。そのようなことを前回でお話しました。

1. 「光」と「やみ」との区別

●「光がやみの中から輝くように」と呼び出された神は、「光」と「やみ」とを明確に**区別**することを「よしとされた」ということが創世記 1 章で強調されています。神はなにゆえに「よしとされた」のでしょうか。そのことについて今回取り上げてみたいと思います。

●光が神によって呼び出される前に、やみはすでに存在していました。創世記 1 章 2 節を見てみましょう。

【新改訳改訂第 3 版】創世記 1 章 1～5 節

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

1:2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。

1:3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

1:4 神は光を見てよしとされた。神は光とやみとを区別された。

1:5 神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

●4 節を見ると、「神は光とやみとを区別された。」とあります。「光」のことをヘブル語で「オール」(אור)と言います。また「やみ」は「ホーシェフ」(חֹשֶׁךְ)です。「オール」と「ホーシェフ」を覚えましょう。神は、「やみ」の存在を認めながらも、「やみ」とは本質的に異なる「光」を登場させ、それをよしとされ、「やみ」と区別されたのです。「区別した」と訳されたヘブル語は「バーダル」(בָּדַל)で、「分ける、分離する」という意味があります。

●そもそも、なぜ「やみ」がすでに存在しているのかという点については、今回は触れないことにいたします。今回は、光とやみとを「分けられた、区別された」というところに注目したいと思います。この区別に

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

当たって、神は「光を昼と名づけ」、そして「やみを夜と名づけられ」ました。この「名づける」という行為は、主権と支配を意味します。また、「あなたにとっては、やみも暗くなく、夜は昼のように明るいのです。暗やみも光も同じことです。」(詩篇 139:12)とあるように、神は光もやみも支配される方です。それゆえ、誰一人として神の支配から逃れることはできないことを示唆しています。

●ところで、光とやみが昼と夜と名づけられましたが、光もやみも私たちの目には見えない現実です。この見えない現実の写しが、第四日目に「二つの大きな光る物」として創造されます。

【新改訳改訂第3版】創世紀 1章 14~19節

14 神は仰せられた。「光る物が天の大空にあって、昼と夜とを区別せよ。しるしのため、季節のため、日のため、年のためにあれ。

15 また天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」そのようになった。

16 神は二つの大きな光る物を造られた。大きいほうの光る物には昼をつかさどらせ、小さいほうの光る物には夜をつかさどらせた。また星を造られた。

17 神はそれらを天の大空に置き、地上を照らせ、

18 また昼と夜とをつかさどり、光とやみとを区別するようにされた。神はそれを見て良しとされた。

19 夕があり、朝があった。第四日。

●ここに登場する「二つの光る物」とは光源の光としての「太陽」と「月」のことだと理解できます。光源としての光る物によって、「昼と夜を区別せよ」とあります。これは第一日の、目に見えない「光」と「やみ」が存在していることの写し(コピー)として造られたと考えられます。目に見えない「光」と「やみ」を、目に見える「昼」と「夜」で示すために、神が創造した存在があるということを物語っています。これを神学的な言葉で表現すると「一般啓示」と言います。

●「一般啓示」という言葉と対応するのが、「特別啓示」(御子イエシュア)です。「一般啓示」とは自然や歴史、また人間の存在(男と女)という形を通して現わされている神の啓示です。たとえば、自然におけるすべての存在は、他とのかかわりをもたないで存在しているものは何一つありません。自然の中にあるすべてがなんらかのかかわりをもって存在しています。樹木一本にしても然りです。太陽の光と熱、大地、水、栄養を摂ることができるように働いている菌根菌の存在があつてはじめて樹木として生きることができるのです。一般啓示としてのこのいのちのつながりはすべて目に見えない神の世界を表わす写しです。しかしこのことも、神の「光」なしには理解することができません。私たちが自然の中にある驚くべきいのちの仕組みをたとえ知ったとしても、それが神を知ることにつながらないのはそのためです。そこで神は「特別啓示」としてご自身の御子をこの世にお遣わしになり、直接的に神の「光」をあかししようとされたのです。

●「特別啓示」である神の御子イエシュアはこの世を照らす「光」として遣わされました。イエシュアが語り、そして彼がなしたすべての行為(奇蹟)は、決して行き当たりばったりの事柄ではなく、そのすべてが神の「あらかじめ定められた」ご計画と密接につながっているのです。このつながりを自然においてあかしし

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

ているのが「一般啓示」です。つまり、目に見える形で啓示されているのですが、「光」を持たない者にはそれを理解することができないのです。天からの「光」に照らされることによってはじめて神の「あらかじめ定められる事柄」に導かれるということです。その事柄のことを、聖書は「奥義」ということばで言い表しています。繰り返しになりますが、神が「あらかじめ定められる事柄」とは、神のご計画であり、神のみこころ、神の御旨、神の目的のことであり、それは決してぶれることなく、神の主権のうちに実現される事柄です。その事柄がやみの世界に置かれることを神は良しとされたのです。ただし、永遠にはありません。やみが永遠に駆逐される時までです。新しい天と新しい地にはやみがありません。

●使徒パウロは主から与えられた使命を以下のように述べています。

【新改訳改訂第3版】使徒の働き 26章 16～18節

16 起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現れて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。

17 わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。

18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中であって御国を受け継がせるためである。』

2. 区別された「光」と「やみ」を表わすさまざまな表象

●使徒パウロは「光」の現実と「暗やみ」の現実を表わすために、さまざまな表象を用いています。その最初の表象は、「**神の知恵**」と「**この世の知恵**」です。同じ「知恵」(「ソフィア」 σοφία)ということばを用いていたとしても、区別されるべき知恵があるということです。

(1) 神の知恵とこの世の知恵の区別

●コリントの教会は、「私は、〇〇〇〇につく」と言って分派をつくり、分裂を招いていた教会でした。その教会に対してパウロは、自分が神から遣わされたのは、(分派をもたらすような)バプテスマを授けるためではなく、福音を伝えるためであるとし、この福音を伝えるに当たって、「この世の知恵によって」はしないと断言しています。パウロが「知恵」ということばを使うときに、「**神の知恵**」と「**人間の知恵**」を明確に区別して語っています。言い換えの名人であるパウロはそれぞれの「知恵」をいろいろな言葉で言い換えています。

① **神の知恵** (Iコリント 1:21)・・・「隠された奥義としての神の知恵」(Iコリント 2:7)

② **人間の知恵** (Iコリント 2:5)・・・「ことばの知恵」(同、1:17)、「この世の知恵」(1:20)、

「自分の知恵」(1:21)、「すぐれたことば」「すぐれた知恵」(2:1)、「説得力のある知恵のことば」(2:4)

●「すぐれたことば」「すぐれた知恵」(2:1)、「説得力のある知恵のことば」(2:4)—それは結構ではないか

と思うかもしれませんが。それらは人間的に見るならば素晴らしい能力のように思います。しかしそれはすべて「人間の知恵」であるがゆえに、パウロはそのような知恵によって「福音」を語ることはしないとしました。なぜなら、「神の知恵」は「この世の知恵」によっては悟ることができないからです。神の知恵をもしこの世の支配者たちが悟っていたなら、栄光の主を十字架につけはしなかったはずだとパウロは述べています。また、「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです」(1:21)と、いわば極めつけとも言えることを述べています。神の知恵は神のすべてのことを知る御霊の助けによってのみ理解できるのです。この御霊は神からの賜物です。この「賜物」について話すのも、人間の知恵によることばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。つまり、「御霊のことばをもって御霊のことを解く」ということです(2:13)。これは詩篇 36 篇 9 節にある「私たちは光のうちに(=光によって)光を見る」というフレーズと同じことを言っているのです。

●パウロは、徹頭徹尾、神を中心とした概念で理解し、そして語るという生き方を貫いています。人間的な概念、人間の経験、価値観、評価によって理解するのではなく、神からの光で、神からの賜物である御霊によって神の世界を知る世界です。御霊を与えられている人は、神のすべてのことをわかまえることができますが、自分の知恵によってはだれもわかまえることができないのです。

●なつかしの CM に、「ダバダー・ダー・ダー・ダバダー」というメロディがありました。「違いの分かる男、ゴールドブレンド」。「分かる者には分かる」、「違いの分かる通の者にはこのコーヒブレンドの良さが分かる」ということですが、違いが分かるというのはあくまでもこの世におけるところの味です。しかし主にある私たちは、「光の子ども」として、「光」と「やみ」との違い、「神のもの」と「この世のもの」との違いが分かって、それを区別できなければなりません。なぜなら、それは水と油のように、決して混ざり合うことのできないものだからです。サラダにかけるドレッシングのように、混ざり合うと勘違いしてはならないのです。違いが分かる者になるには、以下、パウロが語っている事柄の区別を正しく理解しなければなりません。

(2) つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけない

【新改訳改訂第3版】Ⅱコリント 6章 14~18節、7章 1節

14 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。

光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。

15 キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。

16 神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。

「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

17 それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。

そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、18 わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

7:1 愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。

●「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。」の「くびき」というのは結婚のことです。全く違った価値観をもった男女がいっしょに歩くことには、無理があるのです。

- ①「正義」と「不法」・・・・・・・・・・そこには、何の**つながり**もない。
- ②「光」と「暗やみ」・・・・・・・・・・そこには、何の**交わり**もない。
- ③「キリスト」と「ベリアル」(※)・・・・・・・・・・そこには、何の**調和**もない。
- ④「信者」と「不信者」・・・・・・・・・・そこには、何の**かかわり**もない。
- ⑤「神の宮」と「偶像」・・・・・・・・・・そこには、何の**一致**もない。

※「ベリアル」とは、ヘブル語の「ベリツヤアル」(בְּרִיאַל)に相当し、「無い」を意味する「ベリー」(בְּלִי)と「価値、有用」を意味する「ヤアル」(יָאֵר)を合成した語彙で、「無益な者」「よこしまな者」と訳されます。新約時代には定冠詞を伴って人格的な意味を持ち、サタンに対する名称とされています。

●ここには明確に区別されていることがあります。この区別は神が定められたもので、ドレッシングのように混ぜ合わせて良しとしてはならない事柄なのです。なぜ、一見厳しいと思われるような区別がなされるのでしょうか。それは神と人とが共に住み、歩むためです。ですから、区別が必要なのです。旧約のトーラーの中に食べて良い物と食べてはならない物、きよい物と汚れた物の区別があるのは、神の民に「神のもの」と「この世のもの」とを一緒にしてはならないということを教える型であったのです。他の理由は考えられません。

3. エデンの園において与えられた人間の務め

●この問題を、より根源的な視点から考えてみたいと思います。そのためには、神の創造の冠として造られた人間アダムに与えられた務めについて注目する必要があります。

【新改訳改訂第3版】創世記2章7～9節、15～17節

7 神である【主】は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。

8 神である【主】は東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。

9 神である【主】は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。

園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木を生えさせた。

15 神である【主】は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。

16 神である【主】は人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」

●ここで特に注目したいのは、15節にある「耕す」という使命と「守る」という使命を神がアダムに与えたということです。これは何を意味するのでしょうか。「食べるのに良いすべての木」が生え、しかも「園のどの木からでも思いのまま食べてよい」とされていたのです。なにゆえこれ以上、耕す必要があるのです

ようか。何を守る必要があるのでしょうか。しかし神である【主】が「人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた」のには、それなりの理由があったのです。その理由とは何でしょうか。その前に(少々脱線しますが)、「東の方エデン」ということばの意味について調べてみたいと思います。

●「エデンの園」をヘブル語では「ガン・エーデン」(גֶּן־עֵדֶן)と言います。8節には「東の方(ひがしのかた)エデン」とあります。原文には「東」を意味する「ケデム」の前に、「～から」を意味する前置詞「ミン」(מִן)が結びついて「ミケデム」となり、「東の方」と訳されています。「東の方」と訳されると「東の方角」のことだと普通は考えます。しかしその場合、どこを基準にして「東の方」なのかよく分かりません。この「東」と訳された「ケデム」(קֶדֶם)には、他に「前」とか「昔」という意味があるのです。つまり、「ミケデム」(מִקְדָּמָה)で、「前からあった、昔からあった」という意味になります。「昔っていつの頃」と質問されそうですが、それは「地が造られたときから」としか言いようがありません。はっきりしていることは、人が造られた時には、すでにエデンの園があったということです。東の方角にではなく、すでに前からあったエデンという場所に、神は自らの形に似せて造った人(ハ・アーダム)を置かれたということです。ヘブル語で調べてみると、聖書の訳のイメージとは随分と変わってしまいます。しかしこういうことを、自ら原語(ヘブル語)で調べて、その意味を発見して行くことが、これからの新しい世代に求められていることなのだと思います。

●ついでに、「エデン」(עֵדֶן)という意味も調べておきましょう。動詞の「アーダン」(אָדָן)には「ほしいうまに楽しみふける」という意味があるようです。確かに、エデンの園には「食べるのに良い」ものがあり、しかも「思いのまま食べてよい」という園ですから、エデンは贅沢きわまりない豊かな園であったと想像できます。

(1) 「耕す」という務め

●ところで、神がアダムをエデンの園に置かれた目的の第一は、エデンの園を「耕す」ためです。「耕す」と訳された動詞は「アーヴァド」(אָרָב)で、これは後の祭司用語の「仕える」という意味です。つまり、ここでの「耕す」という意味は、神が与えてくださったエデンの園のすばらしさと豊かさを味わい、さらにそこに隠されている豊かさを掘り起こすという務めです。

(2) 「守る」という務め

●アダムがエデンの園に置かれた目的の第二は、エデンの園を「守る」ためでした。エデンの園というからには、園の内と外があります。3章の最後には罪を犯したアダムとエバがエデンの園から追い出されるということが記されています。つまり、エデンの園を「守る」というのは、区別すべきものを区別するという務めであると考えられます。その証拠に、エデンの園の中央には、食べてよいものと食べてはならないものが区別されていました。しかもその食べてはならないものを食べる時、必ず「死ぬ」と警告されていたのです。区別すべきことを区別する務めが、ここでは「守る」(「シャーマル」שָׁמַר)という言葉で表現されています。しかし、アダムはこの務めに対して忠実ではなかったのです。いつの間にか、狡猾な蛇が園の外から園の中に侵入しているのを許していた事実がそのことを物語っています。

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

●使徒パウロが述べているように、明確に区別すべきものを区別することを怠ると、苦い実を食べることになります。もし私たちが神と共に住み、神と共に歩もうと願うならば、区別する務めを、分離すべき務めを、神の知恵によってなさなければならぬのです。なぜなら、私たちは神の知恵によって、神のご計画と御心と御旨と目的とを知らされた「光の子ども」なのですから。

2015.11.15